



コンクール入賞者と先生方

伊唐小

文部科学大臣賞受賞

特別賞に鴨川君 丸橋君

第42回南日本作文コンクールの表彰式が3月11日、鹿児島市の南日本新聞会館みなみホールで開かれ、児童15人の伊唐小学校（春木寛治校長）が3部門で最高賞を受賞しました。

このコンクールには、鹿児島、宮崎両県の171校から479作品が寄せられ、各学年の最優秀作品に贈られる特別賞を、2年の鴨川総一郎君と6年の丸橋雄吾君が受賞。学校の最高賞となる文部科学大臣賞に伊唐小学校が選ばれました。

鴨川君は昨年において2度目の快挙です。このほか、同校からは1年の堂崎慶次郎君が特選二席、3年の鴨川麗菜さんが入選に選ばれました。

全校体制で書く活動を取り入れてきた同校。文部科学大臣賞の受賞で「小さな



伊唐小2年

かも川 そう一ろう

「そう、海がにこってたら言え。」

お父さんが、うでをくみながら、海を見ている。みなとにかえるとちゅう、長くのびた赤いかたまりがながれてきます。赤しおです。

「しまったね、赤しおが出た。」

お父さんは、ふねを赤しおの中にとめます。赤くにこった海の水を小さなカッブにとります。みなとにかえってからは、けんぴきょうでしらべてもらうためです。

「九百九十ぴきいますよ。」

百ぴきをこえると、さかながびょうきになつてしまいます。

「ねん土をまかんば、いけんか。」

お父さんは、すぐに立ち上がりました。

お父さんが、みんなにでんわをかけます。

ねん土まきは、力をあわせないとできません。しんせきのおじさんたちが、それぞれのふねでそうこにあつまってきた

す。ほくぐらいのおもさのねん土をはこ

お父さんと赤しお

と、うでに元気がもどります。ほ

びます。五十ふくろのねん土をみんな

ふねにつみこみます。みんなのかおは、

あせてぬれています。そうこからふね

で、かたにかついでなんかいもはこび

ます。おもくてはこべないほくは、じや

まないように見ているだけです。

あかしおの海につきました。ほくは、

ふなぞこに入つて、デッキブラシで、

ねん土のこなと海の水をまぜます。ふ

ねのそこには、こなをまぜるための水が、

ほくのひざの上まで入っています。

「いれるぞ、じゅんぴはいいか。」

おじさんの声といっしょに、ねん土の

ながふつてきます。上から入れられる

こなが、おうど色のけむりになっては

なに入ります。ほくは、口をかたくと

こなと海の水をまぜます。しばらくすると、お父さんの大きな声がふなぞこに聞こえてきます。

「もつと、ねん土をこゆくせんか。」

すると、ねん土が二ふくるぶん、一どに

ふつてきます。パンツまで水がしみこ

みます。それでもデッキブラシをうごか

して、ねん土をこねつづけます。

お父さんは、小さなふねにのつて、

いけすのまわりを見はります。ほかのふ

ねにさしずをしています。

「おきにもいるから、いけよ。」

「いちおつ、そこにもまいとけよ。」

海いっぱいひびく声がふなぞこに、

こだまのように聞こえます。いつもとち

がう、こわい声です。お父さんの声を聞

くと、うでに元気がもど

ります。ほ

くは、今までよりも力を入れて、ねん

土をいきおいよくかきまぜました。

ねん土まきがおわり、みなとにもど

ります。みんなは、ふねの上しやがみ

んでいます。お父さんがのっているふ

ねが、ほくのとなりにならびます。お

父さんは、まっすぐまえを見て、か

じをりょう手でしつかりにぎっています。

ほくは、お父さんがきのう言った

ことを思い出していました。

「ぎよねんは、二百ぴきしんだが、

赤しおにはまけんぞ。」

気がつくつと、ほくはワイヤーを

ぎゅつとにぎりしめていました。ほ

くは、明日も、ねん土をま

きに、お父さんといっしょに海に出

ます。